

お茶と近江とのつながり
は深く、長いものです。茶
は中国から渡来したもので、
日本での栽培は、延暦
24（805）年に最澄が唐
から茶の実を持ち帰り、近
江国坂本で植えたことがは
じまりとされています。『日
本後紀』には、弘仁6（8
15）年に嵯峨天皇が近江
の唐崎に巡幸し、梵釈寺に
立ち寄ったさい、僧永忠が
茶を献上したという記事
や、同年に畿内と近江をは
じめとする周辺国に茶樹を
植えて、毎年朝廷に納める
ように命じたという記事も
あります。これらは、お茶

を煮出して飲む唐式のもの
と考えられています。製
茶の具体的な様子はわかり
ません。
その後、茶の栽培は律令

茶

近江とのつながり深く

国家の衰退とともに一時途
絶えたようですが、鎌倉時
代になって、僧栄西が宋か
ら茶の実をもたらします。
栄西が伝えた茶法は、粉末
にした茶葉をお湯に溶かし
て飲む「抹茶」でした。鎌

倉時代頃には、京都や奈良
の大寺院の境内に茶園が設
けられました。また喫茶
は寺院に限られていたよう
です。しかし、室町時代に
なると喫茶の風習は定着
し、本格的な喫茶文化が花

さらに、近年県内各地で
進められている発掘調査か
ら茶道具が出土し、喫茶の
広がりがかつてきまし
た。高島市安曇川町の西万
木遺跡は15世紀後半から16
世紀前半頃の館跡です。こ

の地域の治めた領主一万余
人の居館と推定されてお
り、出土した遺物に、中国
製の茶入や朝鮮半島から舶
来された茶碗などの茶道具
に加えて、花を生ける中国
製銅壺、お香を焚く青磁の
香炉、茶臼などが含まれて
いました。舶来品をあつら
えた茶席で、お茶を楽しん
でいた領主の生活の一端を
うかがえる調査例です。ま
た、湖南市夏見城遺跡や彦
根市妙楽寺遺跡などからも
室町時代の茶道具が出土し
ています。

もう一つ注目しておきた
いのは、室町時代後期頃以
降の中世集落遺跡を調査す
ると、炮烙（ポウロク・ホ
ウラク）が出土するようにな
ることです。炮烙とは浅
い鍋のことで、穀物を炒る
ための道具と考えられてい
ますが、製茶に必要な茶葉
保護協会 辻川哲朗

屋敷内のごみ穴から出
土した石臼
— 高島市の西万木遺跡



開き、千利休などが日本文
化の粋ともいえる「茶の湯」
へと発展させました。

この頃の文献史料から
は、各地の荘園や村内寺庵
に付属する茶園があらわ
れ、茶を栽培したことがう
かがえます。室町時代後期
頃、近江国今堀（現東近江
市今堀町）の村にあった庵
室には、茶葉、茶臼・焙炉
（お茶をあぶり乾燥させる
ための道具）などの製茶道
具、茶道具が備えられてい
ました。

を炒る工程にも用いられた
のではないのでしょうか。こ
の点については、まだ検討
の余地がありますが、喫茶
の広がりを知る手がかりに
なるのではと考えていま
す。

その後、江戸時代になる
と、中国（明）からお茶を
お湯にひたして飲む方法が
伝わってきました。この「煎
茶」が、現代のわれわれが
日常的に飲む「お茶」へと
つながっていきます。近江
は茶の主産地である宇治に
近いこともあって、甲賀・

湖南地域を中心に茶の栽培
が盛んになりました。江戸
時代後期には、茶は近江を
代表する農産品の1つにな
っていました。近江には「茶
の国」という一面もあると
いえるのです。